

忘れ得ぬことども

前川 春雄

大平総理とゆっくりお話ができるようになったのがいつ頃からであったか正確には覚えていないが、もうその頃は先生とお呼びする身分になっておられたと思う。しかし大平さんとお呼びする人の方が多い十人くらいの集まりであった。人も知る通りのご性格のため談論風発するというふうはなかったが、「寛厚と誠実を以て人に接しなければならぬ」とご自分で書いておられる通りのご様子は、その頃から強い印象をひとに与えておられた。

国際金融の問題が漸く論議されてきた頃で、私もその方面の仕事をしていたため、国際流動性やら各国の対応などがわれたが、総理として大成される間に、この広い視野でものを見られる姿勢はさらに大きく深められたことを感じた。その後大蔵大臣になられ、ちょうどその年の末に私も輸銀から日銀にもどり、森永総裁の下で副総裁を務めることになり、お目にかかる機会が一層多くなった。当時は石油危機前後のインフレもようやく収まりかけていたが、一方景気は低迷し財政面の歳入欠陥が大きく顕現し、また対外的には国際経済の舞台に否応なしに登場させられた時代で、大平大臣の世界的視野もさらに拡げられたが、またご苦勞も多い時代であった。

五十一年末、大蔵大臣を辞されてからしばらくはお目にかかる機会もなかったが、五十三年末に総理としての重責を担われるにいたり、再び何かにつけお目にかかる機会もふえるようになった。折しも再び石油危機ともいふべき原油価格の引上げが始まり、インフレ気運がまたしても全世界を覆い始めてきた。こうした状況から金融

政策も五十四年初めから引締め政策に転じたが、前回の石油危機の経験を生かして、早目早目の対応を行い、同年中に三回にわたり公定歩合引上げが行われたのに対し、そのつど大平総理の強いご支持があたえられた。森永総裁のあとを私がお引受けすることとなったのは、そうした状況のさなかの五十四年末であった。

その後物価情勢は五十五年初めから悪化するばかりとなり、卸売物価は一月以来毎月二%を超える上昇が続き、円相場も買支え操作にもかかわらず低落を続けるなど、狂乱物価の再現すら心配される状況となった。それまで比較的堅実な対応を示してきた企業心理にも物価先高感から微妙な変化が見られ始めてきたため、公定歩合引上げを含む引締め強化が不可避との判断を固めざるを得なくなってきた。折から国会では予算案が審議中であり、そのさなかの公定歩合引上げは極めて異例かつ高度の政治的判断を要することであった。物価情勢からは一刻も猶予し得ない状況であり、またサミットを控え物価並びに為替安定に最大限の努力を払うということが政治的にも重要なことだと思われたため、森田秘書官を通じて総理の政治的ご決断をお願いすることとした。

総理は私の説明に真剣に耳を傾けておられた。いろいろのことが脳裡を去来しておられたに違いない。最高責任者としての責任の重さがひしひしと伝わってくるような感じがした。辞去する私に、「難しいからこそやり甲斐があるんだよ」と、かえって励ましのお言葉をいただいたことが忘れ得ぬ印象であった。極めて難しいご判断であったと思うが、総理のご支持を得て公定歩合の引上げを終った翌日、官邸にご報告にあがったさい、「日銀の判断は正しかったと思うし、政治的にもよかったと思う」といわれたことが、私にとっては終生忘れ得ぬお言葉であった。その後サミットにもご出席になれず、われわれの必死の祈りも空しくご逝去になられた。

物価はその後鎮静を示し円相場も落ち着いていた動きを示し、日本経済のパフォーマンスが世界中から評価を受けている状況をお目にかけることができなかつたことは、かえすがえすも残念至極である。

(日本銀行総裁)